

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



二 圭田須 編輯長
市田上縣野長 所行發
校學門專絲蠶田上 所行發
會 町縣南市野長
社會式株開新日每邊信 所刷印

蠶体病理學の意義

勝又 藤夫

私は甚だ潜越乍ら本問題に對し私見を提出して先輩各位の御教示を仰ぎ度いと思ふものである。

私が茲に斯の如き問題を取扱ふ所以は從來の蠶の病氣に關する専門書籍に就いても此の蠶体病理學の意義が明瞭に把握出来なし此の問題を論議した論著を見受けなためである。

從來蠶の病氣を専門に扱つた書籍は多數あり蠶病論、蠶体病理學、蠶病學等の名稱を附してある。併し乍らその殆ど全部は單に各種の蠶病に就きて個々に記述したものであり謂所蠶体病理學なる物は一つとして存在しない。何れも蠶病論に止るものである。即ち學としての組織と体系を具へて居らぬものである。

吾人は「蠶体病理學は蠶病の原因病名、病徴、病變及豫防治療等を研究する學問である」と教へられて來たが事實蠶体病理學は動物學でもなく、植物學でもなく、又養蠶學でもなく此等各學問の應用に依つて成れる一定の体系を具へた獨立科學である。

る。勿論蠶体病理學は物理學、化學、動物學、植物學、微生物學、或は昆蟲學、養蠶學等の進歩に依つて非常なる發達をなし得たことは明かであるが夫等の學問の一分科ではあり得ない。

扱て蠶体病理學と蠶病學とに就て考へねばならぬが蠶病學なる詞は比較的近年に用ひられたるものである。私は蠶病學は蠶の病氣に關し研究する總べての方面を含むものであると解し蠶体病理學の廣義のもの（今日迄の慣用は主として廣義のものなり）とその領域を等しうするものであり、狹義の蠶体病理學は次に論ずるが如きものと考へる。而して近年蠶病學なる名詞の使用せらるるを以て廣義の蠶体病理學はその意義を蠶病學に譲り蠶体病理學は狹義のものにのみ解釋するを可ならんとす

るも言葉は習慣と約束より成るとすれば從來用ひ來れる廣義の蠶体病理學の意義も敢へて棄つる能はざるものがある。蠶病學をその目的により分ちて次の如くす。

蠶病學（廣義の蠶体病理學）

の分科（私見）
一、蠶病學史
蠶病學の既往發達の經過を論じ現状

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成
Y0.30

伊太利蠶絲絹業の現況退原因と其修正
Y1.50

菅原勇治著
蠶絲業法規要論
Y2.30

市田上縣野長 所行發
會究研學科絲蠶
(振替長野0413番)

諸般の關係施設、諸法規等を叙し兼ねて蠶病の歴史をも叙し今後の進路を叙す。

二、蠶体病理學（狹義のもの）

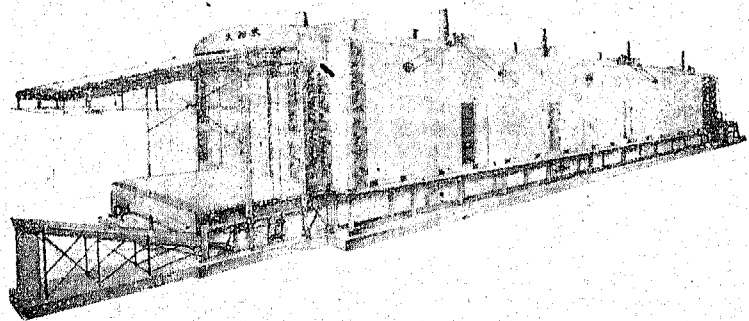
蠶病の徴候、病原、病体解剖、病体生理を研究し蠶病の本態を明にする學なり。従つて蠶病の豫防治療を目的とせず。蠶体病理學は病徴學、病因學、病体解剖學、病体生理學等に分つて出来る。

三、蠶体治療學

蠶病の豫防治療、治療法を確立する學なり。従つてそのため蠶病の病徴、原因、病体解剖、病体生理を研究することあるも勿論此等は豫防治療、治療法を確立するの手段にして蠶体治療學の目的ではない。蠶体治療學は衛生學、治療學、防除藥劑學等に分つて出来る。此の蠶体病理學と蠶体治療學とに於て研究上同一過程を踏むこともあるも何等支障なし此の兩者はその目的が異なるを以てなり。

以上の如く蠶病學の意義を考慮するならば蠶病の研究に従事する者の取るべき態度は自ら明瞭なりと信する者である。即ち大學、専門學校或は國立試驗場等に席を持たるる學者は蠶体病理學（狹義のもの）に精進し

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



1933年代表型

【型録贈呈】

製作發賣元

株式會社

大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目

- 特許大和式自動輸送乾燥機
- 特許帶川三光式乾燥裝置
- 特許願やま電ホイロ機
- 特許大和式熱湯自動還元機
- 特許水野式改良ロストル
- 特許アイエム・コルセダー
- 特許アイエム・ストーカー

以て大いに蠶病の本態を明かにし蠶体治療學の基礎的事項を究明せらるるも宜しく。或は蠶体治療學を攻究せらるるも可なりであるが私共府縣蠶業試驗場等に席を占むる者として蠶体治療學を研究すべきであると信ずる。勿論吾々とも蠶病の原因病徴、病体解剖、病体生理を攻究するに躊躇するものではないがその目的は蠶病の豫防治療、治療法を確立するためであつて蠶病の原因、徴候又は病体解剖、病体生理そのものを研究目的とするものではないこと勿論

なりとする。而して此等各分科に學としての輕重のないことも勿論である。

【本論には逸見博士植物治療學、日野博士植物病理學の意義（病蟲害雜誌二〇卷二號にて日野博士は植物病理學の意義を論じ斯學を）、植物病理學史、二、病因學、三、病徴學、四、病態解剖學、五、病態生理學、六、衛生學、七、治療學、八、防除藥劑學の分科とした）川村、革間兩博士病理學總論上卷、同博士近世病理學總論を參考とした】

開港拾遺集 (二)

横濱 正木章三

注進争ひの事

ベルリの船がやつて来た折に斥候に出で居た船から「それ異國船見えたり」との通知が来ると、先づ第一に江戸へ注進しなければならなかつた。その時下る御用状は二通あつて一通は御馬役に渡し御馬役は之を受取るに直に陣羽織を着けて、軍時の扮装にて、御用状を首に懸け馬に打ち跨つて江戸表へ向けて疾走したとの事です。

その道順は、先づ浦賀より横須賀を経て十三峠(今日の湘南アルプス)を越えて金澤に出て、能見堂(久良岐郡金澤村)を過ぎ東海道の程土ヶ谷宿に抜け、一直線に江戸は溜池なる久世大和守の上邸に向つたと記されてある。

他の一通は船手組に渡す。船手組は押送船(御手船と稱す)に漁夫十名程を乗り組ませ、之を水主兼配役一人その下役(下輕待遇)一人の一行が芝の赤羽根橋として御用状を運んだそうです。

その二組の使者の何れにても早着の方の者が、褒美を頂戴する事になつて居たとの事で、幕府賞水陸争奪戦が展開されたと云ふ譯です。

この注進競争の水路のチャンピオンに選ばれたのが、公郷村(三浦郡豊島村)の小松原傳右衛門と云ふ水主兼配役を務める人でした。小松原氏は御用状を受けて、海上に乗り出して見ると恰も幸ひ順風であつたので、勇躍して必勝を期して一同に向つて曰く。

今日送送り風なれば必ず御馬役に勝つを得べし。然らば褒美は乃公の方に貰はるべし。

皆骨を折り勉めよ——と勵ましたとの事です、そして自分は御用状並に陣羽織を濡らさぬ様にと、御用状を懐中にして、陣羽織及大小刀は蓆に包んで船の軸の下に置いた。

順風に送られ船は早くも赤羽根に着いた。所が、傳右衛門氏余りに功を急ぎあせつたため、そのまゝ溜池に馳せ着け、陣羽織及大小刀を船中に忘れて来て仕舞つたと云ふのです。その爲めひどく御叱を受けたとの事、村へ歸つてから残念がつてこぼして居たと記されてあります。

空堀漂流の事

ベルリの軍艦が浦賀沖に定泊して居たので彼等の飲用した葡萄酒や麥酒の空堀が波の間に間に漂ひ、又は海岸に打ち上げられて居た。

堀を拾得して黙つて家に持ち歸る者は罰を受けなければならぬから、一々拾得場所時日とを届出でよとの事です。即ち時の役人の曰く。

是れは先方に於て毒を入れ置くものならん。若し此中に毒の入れありしならば大變なり。然らざれば斯の如きものを流す道理なし。必ず盛るに毒を以てし、日本人をして苦ましめん軍略ならん。依つて一ヶ所拾ひ置く場所を設く可し。心得違ひの者ありて万一届出でざるあらば直に召捕る可し——

と云ふので、彼の村から五本やれ此の濱から三本と、續々と届出で、毎日役人がかゝり切りで、一軒の空堀を借り受けて其の中へ積み入れては嚴重に戸締りを爲したとの事、こ

の係の一人であつた一老人が當時を懐つて次の様に述べて居る。

——今に於て考ふるに是れ皆彼等が日々飲用せる酒類の空堀を海中に抛棄せるものなりし。實に笑止千萬の事なりしと。

ビール空堀を恐々と手につまみ空堀の中へ積み入れて戸締りして番をして居たと云ふ役人を想像すると如何に當時の人々が神經過敏性になり恐々として居たかが察せられ笑ふにも笑はれないものがあるではありませんか。

異人犬發病の事

嘉永七年(安政元年)に至つて、アメリカの使節マツシユウ・シー・ペルリが前年の約によつて再び來航した時に、士民が書き止めて置いた日記に、亞理理駕船渡來日記と云ふのがある。(即ち野漢氏の校になる武相叢書第一編)

この日記の筆者が、外人共の行動をつぶさに觀察して居るが、その中から拾ひ出したものである。

一、十二日(嘉永七年二月十二日) 今日異人犬を曳連れ来る。毛色薄赤く形甚だしく狐の如し。日本の大犬澤山に居合候得共一切此方より喰合等不仕候。不斷見馴れぬ異犬に候得ば却而大犬恐る様子。然共先方の犬、大犬に恐れ候にや、途中にて眼を廻し既に死んと致し候。異人共何やらつぶやき乍ら曳き返る。

彼の國の犬皆かように小形の由。尙又日本の如く白黒の斑なし。此犬尾なし—— 偶然にも犬を例に取つてはあるが犬の心理状態の察しの良い當りを見

ると、當時の人々が異人に對して恐ろし乍らも色々物珍らしい事を知りたがつて居る様子が想像されてなにか〜に興味がある。(續)

郵便屋のよゝい

碓氷 茂

蠶絲會館で一番まごつくのは郵便屋だ。手紙など實に出たら目だ。僕等の事務所へ。製絲組合の手紙も舞ひ込んで来れば、種屋組合の手紙も舞ひ込んで来る。お蠶組合の手紙も来る。大日本蠶絲會といふのや、日本中央蠶絲會、さては蠶絲業同業組合中央會。ひといのにならんと蠶絲會館内ホテル様などといふのが来る。さうかと思ふと、東京丸の内「家の光」懸賞掛などといふ傑作もある。(尤も「家の光」は産業組合中央會で編んでゐるからそれが舞ひ込んで来るのも無理はないかも知れぬ。その反對に僕等の事務所宛の手紙、とんだ所へ配達されてゐる場合が多々存する。

まごつくのは郵便屋ばかりぢやない。訪問客の大部分がまごついて、漸くにして尋ねあてゐる者が少なからず存する。

そればかりぢやない。小使クンさへ未だにまごついてゐる。つい昨日だ僕が出動したら忙しくやつて、來

「昨晚電報が参りました」といふ。見たら「サンシユギョウクミアイ」とある。種屋宛だ。

「僕等のところぢやない種屋組合だ」といふと小使クン未だに吞み込めな

い。「二階のつき當りの種屋だ!」「あゝさうですか、さうですか」漸くのみ込めた。

蠶絲會館内は万事かくの通り。それもその筈だ。全國養蠶業組合聯合會・全國蠶種業組合聯合會・全國製絲業組合聯合會・全國産業組合製絲組合聯合會・日本中央蠶絲會・大日本蠶絲會。これぢやまごつくのも尤もだ。まごつかぬものがどうかしてゐる位だ「全國……聯合會」だらけで何が何やらわけがわからぬ。困つたものだ。一層のこと松・竹・梅とでも書いておいたらどうだ。

六月の中旬に信州へ出張した(紀行文はこの次に書く豫定である)。東京生活で人いきれのしてゐるのにあきあきしてゐる僕には、出張が非常に嬉しかつた。青々としてゐる田畑を一目見ただけで心が晴々する。今が丁度田植の眞盛りで、信濃路では到るところで田植をしてゐるのに出逢つた。麥の刈り取りの最中のところもあつた。輕井澤から香掛の間だつたと思ふ。田植の人達が一休みしながら僕の乗つてゐる列車を見送つてゐて呉れた。

僕も郷里にゐる頃は、一人前とは行かなくとも、少くとも半人前以上には田植をすることが出来たものだ、その頃のことを思ひ浮べながら信濃路の旅を續けた。

さうだ。僕の郷里でも今頃が田植

夏の旅を續けてゐると一番うれしいことは宿屋へ這入ることだ。汗だ

とある。種屋宛だ。

らけの洋服をぬいで、風呂へ這入つて出たときの心持は一番いい。安會などで夜おそくなつて、風呂へも這入れなかつた時は大變損をしたやうな気がする。旅をした時は早く宿屋へついてゆつくりする心持ち程望ましいものはない。

概して夏の旅は旅するものにとつては餘りよくないが(尤も夏の夕方を歩いてゐる心持はいい)宿へ這入つて風呂を浴びた時の心地は夏の旅に於て始めて味ひ得られるなつかしさだ。

× × ×
 今年は蘭の値が案外いゝので養蠶家は概してほくほくしてゐた。然しここ数年の蘭價安により打撃は養蠶家の懐工合をさう急に回復し得るものではない。だが養蠶家が氣をよくしてゐることは事實だ。

× × ×
 とはいへ勿論信州地方で競はれたものは現實の景氣ではない。養蠶家が蘭を賣つたら景氣が出るだらうといふ將來に對する豫想景氣だつた。たとへ豫想景氣でもいゝ。人々はさうした景氣の出ることを望んでゐるのだ。

× × ×
 もう信濃路には月見草が咲いてゐた。鐵道線路に沿つて、黄色い花を浮せてゐるのが時々目についた。月見草といへば直ぐ千曲川が連想される。そして又千曲川と共に過去の自らの姿が、繪巻物を擡げるやうに展開されて來た。殊に夢を描いてゐた多感な頃の姿が蘇つて來た。

JOAKでは近頃毎晩、最後に生蘭相場の放送をやる。昨年迄僕は生蘭相場の電信略號を翻譯するために五日に一度位づゝ愛宕山の放送局へ夜通つたものだ。今年も「放送」と關係がなくなつたので放送局へは行かない。その代り毎晩のやうにラヂオの生蘭相場を聞いてゐる。勿論僕のところにラヂオはないから、街で立ち聞きをするか、或は隣の家でやつてゐるのを聞いてゐるのだところが困つたことがこゝにある。といふのは東京人は兎角生蘭相場に關係がないと見えて(勿論時間が遅いからでもあらうが)、生蘭相場の時間になるとスキッチを切つて了ふのが多い。遂に昨晚(六月二十六日)だ。僕は理髮屋で頭をいぢつて貰ひながらラヂオを聞いてゐた。生蘭相場の時間が來たので興味を持つて、今日の相場はどんなか聞かうと身構へしてゐると、理髮屋の小僧がカチンとスキッチを捻つて了つた。癪だ。今晚(六月二十七日)も読みものをしてゐると隣でラヂオをかけてゐる。生蘭相場の時間が來たら聞き身を立ててゐると、急に音が止んで了つた。これもスキッチを捻つたためだらう。それで僕は思つた。「都會(大都市)の連中には生蘭相場が如何に無視されてゐるか」と。

× × ×
 あまりたよりにならぬ世界經濟會議がいまロンドンで開かれてゐる。暑くて大變だらう。御苦勞千萬だがこちとらはさうしたもの大した期待はかけてゐない。もともとどうも行く筈のないものに期待がかけられぬからだ。

× × ×
 近頃蠶絲會館の講堂はメツキリ發展し始めた。英語の講演會があるやう(勿論蠶絲會館を貸與したため)、例の成城學園のゴタムが討議されるやう、何とかやら女學校の同窓會が開かれるやう、それはそれは忙しくなつた。お蔭で、美しい顔を拜む機會が甚だ多くなつたといふわけだ。頗る華やかでいゝ。ただ困るのは兎角氣が散り勝ちだが、此頃のやうに暑くては勉強もロクスツポ出來ぬから、どうせ勉強の出來ぬ位ならイツソのことシヤンの顔でも見てゐた方が増したと考へてゐる。さうして僕は暇さへあれば(？)シヤンの姿を見つけて歩いてゐるよ。

× × ×
 實際蠶絲會館の近頃の出世振りは目ざましいものだ。嘘だと思つたら來て見て呉れ給へ。論より證據。

× × ×
 色々な工場を見て歩いてゐる内に最近各社で新しく購入したと云ふ機械が總て獨式又は佛式の如き大陸式である事が看取せられる。それが紡績は勿論機械、染色、整理及莫大小等あらゆる織維工場に對し共通の事實であるから驚く。ザルツァー、シユワルベ、アルザス、ハトマン等の名稱は新規購入の機械に冠せられたよく聞くメーカーの名前である。堅牢簡單を特徴とし我が國民性に適すると云はれ會てはあれ丈我が織維工業界を風靡せる英國式

も時代の流れと共に精密複雑なる大陸式(之の外に丈が低いと云ふ特徴あり)の軍門に降れるか。之の原因を我が國民性の進化と考へるべきか又一時の輕薄なる流行と考へるべきか。

× × ×
 ミニールと云へば悉くローラーパットが停止しキヤリツジが往復運動をしてゐたものである。然るに此處にそれと丁度反對則ちキヤリツジが停止しローラーパットが往復運動をしてゐるミニールを某工場で見たと。それはシユワルトザルツァー社製のもので從來のミニールに比し次の如き特徴を擧げる事が出来る。

一、スピンドルの如きハイスピードの部分で停止せる事
 二、重量の少きローラーパットが動く事
 三、工手が糸繫等の際動く必要な事
 四、以上の結果動力二〇%の節約回轉數三〇%の増加を得られる事

× × ×
 缺點としてはスライバーの補給が困難なる事が擧げられるが大體に於て從來のミニールに於て企て及ばざる多くの利點を有し將來のミニールは全部之の型になるものであると豫言し度い位である。大部このミニール提灯持をしたが決してザルツァー社の手數料を貰つた譯ではない。

× × ×
 年々生産される織物は前年と同一の色を使用する事が無い。必ず多少の變化を與へられてゐる。その色を決するに於ては次の如くする。各種の色のサンプルを濃色から淡

色迄合計一〇〇種位を作つて各デパートに送り本年度に流行する豫想の色を記入して貰ふ。その内最も多く記入されたもの二五種位を撰抜して本年度流行豫想色としサンプルを作り説明を附して各機屋に與へる。機屋では適當の模様之のサンプルの内にある色一乃至數種を採用し織物を作り又は織物とせる上に捺染するものである。

× × ×
 最近輸入された模様を作る機械にパリオグラフと云ふものがある。昔よくあつた子供の玩具がガラスを幾枚か合せて作つた筒の外側をカバシ筒の底に葉等を入れると各ガラス面に反對して模様となるものがあつた。之の原理を應用したもので非常に便利な機械である。圓形に切つた白紙に出駄羅目の色と形をこねくつたものゝ位置を變へ及びレンズのみの形を丸、六角、四角等種々に變へる事に依り又は之に異物を挿入する事に依り數千種の模様が筒の壁面に映寫される。之の内比較的よいと思はれる模様を寫眞に寫し實用に供するものである。然し之れで得られる模様は總て幾何學的のみなるを怨みとする。

× × ×
 上田ではあまり行かぬ湯へ東京へ來てからは毎日行つとるです。東京へ來たら少しスマードにせんといいかんです。上田の湯と東京の湯とは大部違つとるです。まづ遙かに眺めると堂々たる工場のその様な大きい鐵筋コンクリートの煙突が立つとるです。丸太ん棒に土管を針金で縛付

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

× × ×
 色々の横定

けた上田の煙突などはくらべもんに
ならん。湯屋の入口を入つて下
駄をぬぐと下足札を呉れる。番
台に五錢出して板の間へ上り出して
呉れた籠へ着物をぬぐと又札を呉れ
る。前の下足札はぬいだ着物の
袂へ今度の札は手首にかける規則だ
そう。仲々六ヶ敷しいである。云
ひ落しました。下足も番台も
籠を出して呉れる人も皆いと美し
い。別嬪さんの娘さんである。

かくて親譲りの着物丈になつて流
し場へ入ると湯と水のコックが十數
個並んだ。手で押してゐる間丈
湯なり水が出て離すとストツプす
る。人相の悪いのがズラリとコッ
クの前に桶を置いて洗つとる。桶
の形もやゝ違ふ。楕圓形であ
る。

湯船は三パートに別れてゐる。
ぬるくて浅きもの、暑くて深き
もの及薬湯となつとる。私は第
一處理をぬるい部分で第二處理も
仕上處理を暑い湯でやる。

他に違つた處はと……あ、ある
です。その着物をぬぐ處から女の室
は絶体にのぞけんです。その圍たる
や實に嚴重である。二重にも三
重にもなつとる。

京城から

昌慶苑の櫻も散り此處京城もそろ
／＼夏らしい。涼風を逐ふての漢江
のボートも満更ら悪い氣持もしな
い。
絲値の繰上りは繭値高となりお蔭
で細りきつたウリ等(鮮語でウリは
内地語で私)の首も少しは太くなつ
たらしい。毎晩お神酒をあげ三拜九

拜し其の揚句朝迄寝相悪く高野。春
眼は腫を覺えずなんて云える時節に
なつた。人間なんてほんとに氣儘な
もんだ。去年の今頃は、十三掛八
分と云ふ掛目で青息吐息で大意した
のはけろりと忘れてゐる。私此の頃
憂鬱よと云ふ頃の文句とは反對に全
く今日此の頃は私ほがらかよ。

朝鮮と云つても随分廣いが筆者の
住んでゐる京城附近の百姓が打續く
數年來の不況にも不撓荒波にもまれ
ながらも結構生きてゐる。米の飯を
食つたかそれとも草の根で飯をしの
んだか判然しないが心臓の鼓動だけ
は多少不規則でも人並に打つてゐる
らしい。此處四五年と云ふものは繼
續的事實となつてゐた養蠶地獄は
忽にして天國への急テンポな轉換と
なり蠶の村にも昨今久し振りに慈雨
があり喜色躍如たるものがある。農
村の振興とか自力更生の運動勿論よ
ろしいが繭の値段の高い方が手つと
り早くてなほよろしい。繭一貫目で
五圓紙幣のお顔がゆつくり拜める。

沿津の初相場には朝鮮でも多大の
關心を持つてゐる。其の結果が四十
二掛と神様は出して下さつた。朝鮮
では。各道の蠶業主任官の御歴々が
白票の殿堂は本府にはせ參んじ繭値
基と云ふものを決めるのが例年の慣
習だ。そして百姓にも製絲家にも損
がない様な公平な掛目を決めて下さ
るとの事。神様の様な事をして下さ
る。全く有難い制度だ。此の制度を
詳細紹介したいんだが余分な事だか
ら後日にゆづるとしやふ。
結局繭値基は二七〇圓と決定され

絲價が八五〇圓の時約卅六掛になる
らしい。去年の約三倍。
清水、矢澤兩技師と丸山全南道是
製絲支配人の御三人を迎へて例年通
り小さい集りを開いた。本府の牧野
氏からの會場其の他準備の御命令が
筆者に下つたが更に責任を京畿道廳
の沈興燮氏に轉化し色々御骨折りを



願つた厚く筆者から御禮を申上ま
す。その爲め今までのに非常に盛
會だつたので以後は會場のお世話は
一切沈氏にお願ひする事にした。會
合を益々盛會ならしめんが爲に。
1、日時 六月五日午後七時から
2、場所 京城本町二丁目 松金
3、集つた人
清水達太郎氏 矢澤茂登一氏
小笠原安重氏 三好圭一氏
興燮氏 柳原敏男氏
都 辰華氏

製絲科名
丸山忠良氏 堀忠太郎氏
本山正美氏 牧野春雄氏
内藤次郎氏 山井千幸氏
4、宴會の様子
イ、筆者はこんな會合の模様を鳴

物入りで然も美言名句を使つて
書く事はいたつて不得手だ。充
分當夜の模様を書き現せないと
思ふが大休の事だけを書きあと
は讀者があればその人の御想像
にまかせる事にした。
會場松金と云へば京城はおろ
か全鮮一のテンブラ屋と云ふ定
評がある。然しテンブラばかり
で怪氣焰をあげたわけではな
い。一人分十數種の山海珍味の
あつた事は勿論である。
當日の珍客は忠南の陸軍砲兵
中尉殿は三好氏である筆者は初
對面ではあるがあの堂々たる体
驅で滿洲問題でも一席と思つ
た。

今までの會合でこんな澤山の
同窓生の方々が集られた事はな
い。空前の盛會だつた。これも
會場係の沈氏の御努力の結果と
感謝してゐる。
水原から(京城迄約十里位)わ
ざ／＼自動車で御來場下さつた
山井氏がある。十里も自動車を
飛ばすなんて豪勢なもんだ。だ
から此度の會合は盛會だつたの
だ。

實習場所々在地 實習場所
三重縣度會郡川俣町 三重縣蠶業試驗場
福島縣柴川町 福島縣蠶業試驗場
長野市岡田 長野縣蠶業試驗場
神奈川縣高座郡海老名村 神奈川縣蠶業試驗場
金澤市西御影町 石川縣蠶業試驗場
長野縣南佐久郡野澤町 井田藤平
前橋市岩神町 坂東蠶種株式會社
水戸市外常盤村 茨城縣蠶業試驗場
長野縣小縣郡塩尻村 藤本蠶業株式會社
長野市岡田 長野縣蠶業試驗場
三重縣龜山町鹿島 龜山蠶種株式會社

へ、十時頃だつたと思ふ一度に小
笠原、丸山、清水、矢澤氏に電
話がかゝり退席なされた。京城
には一つの受話機で四人が一處
に話が出来る最新式の電話のあ
る事を御記憶願ひたし。
ト、時節柄猫は遠慮する事にした
が二次會以後は此の限りにあら
ず。
チ、散會は十時半充分残物整理の
上散會したが其の後の行動は一
切不明。無事なれかしと祈りつ
つ筆者だけは眞直ぐに歸宅す。
(六・八・N生)

學生校外實習
其他
本年度養蠶科第二學年校外實習
派遣地は左の通りであります。實習
地同窓會支部長の各位にも御依頼し
て置きましたが、實習所の方は勿論
一般の皆様にも學生の爲に種々御便
宜賜はらんことを御願ひ致します。
尙實習期間は三十五日間でありま
す。

學生氏名	開始月日
青木 深	七月十三日
青木 幹夫	八月一日
淺川 茂樹	七月二十日
伊藤 幸男	七月二十日
江口 嘉清	七月十六日
大山 融	七月十五日
韓 治 鍊	七月十五日
國島 正	七月二十五日
古平 義雄	七月十五日
小林 敏	七月二十日
小松 茂男	七月十五日

Table with columns for location (e.g., 鹿兒島縣鹿屋町), organization (e.g., 昭和産業株式會社), and date (e.g., 七月十五日).

製絲科

六月十八日から七月四日迄養蠶科... 製絲部本年度春繭の仕入は大休七千疋...

いが漫問おろしの風は一入寒さを感じた... 六月一日 松崎昇平(絲二十)...

昭和八年度製絲科第二學年校外實習派遣工場及學生氏名

Table with columns for location (所在地), factory name (工場名), and student name (學生氏名).

紡績科

紡績科二三學年生二十五名は例年の如く七月一日より全国各地紡績會社工業試驗場等二十四ヶ工場に實習のため派遣された...

暑中御見舞

長野縣上高井蠶業學校 佐谷戸健次郎	岡山縣勝間田農林學校 中島靜太郎	宮崎高等農林學校 中島茂	長野縣諏訪郡中洲村 中洲實業補習學校 奥野憲三	山口縣岩國町 山本誠	和歌山縣御坊町外湯川村 片倉紀南製絲所 遠藤文平	横濱生絲検査所 宮入誠一	釜山府凡一町 朝鮮紡織株式會社 加藤明	滿洲國哈爾濱新市街花園街二一 清水衛敏
----------------------	---------------------	-----------------	-------------------------------	---------------	--------------------------------	-----------------	---------------------------	------------------------

水戸工兵第十四大隊
第三中隊幹部候補生

池内眞吾
白川孝昌
丸山力藏

轉任の御知らせ

暑さの御益々御壯健の事と存じます。私事福島縣立蠶業學校勤務中は種々御高配に預りましたが去月左記へ轉任することになりました。今後とも何卒よろしく願ひます。

福島縣立會津農林學校
田附卯一郎

通信

印度洋上鹿島丸
古谷教授より

拜啓深縁の候愈々御多祥の事と奉遙察候。驛頭に御別れ申候よりはや三週日を経過致し雲烟四〇〇〇哩皆思ひ出の種ならざるは無之候途中上海香港、新嘉坡、彼南等に上陸致し心行くまで見學仕り候。南海の風物皆珍、目を驚かさざるもの無之候。上海にては中澤周造、渡邊齋雨君の御案内にて市内は勿論隈なくまた去ぬる事件の戦跡を訪ね實に近代兵機の戦慄すべき威力を見林聯隊長の墓及空閑少佐奮戦の地を弔ひ感慨久しうするもの有之候。時恰も日本人拾數

人來り詣で皆脱帽禮拜し如何にも感慨無量の態に有之候。之れ實に日本の強き所以としみみ思ひ申候。香港新嘉坡等實に堂々たるものにて何れも人口八十萬大廈櫛比し都市の施設完備し又船舶の出入織るが如く貿易額何れも拾萬弗との事に候。世界到る所にかゝる根據地を有する大英帝國既に老ひたりと雖、其の勢力未だ容易にぬくべからざるものあるを思はしめ候。同胞の在住する者香港四〇〇〇新嘉坡三五〇〇何れも多くは商工業又はゴム栽培等に從事致し例の娘子軍は近來極めて少數との事にて洵に慶すべき現象に有之候。排日問題も近來は露骨なるもの無之以來激減したる商取引も追々好況に向ひつゝ有之候由。しかし上海は未だ非常なる打撃にて殆商取引皆無の狀態に候右は三井物産員の實話に有之候へば先づ實況と見て可と存候。しかし昨夜無電ニュースに據れば支那もいよいよ閉口し抗日を斷念し犯したる者は嚴罰に處すと報せられ候へば追々商權復活致すべく洵に結構の事に候。之れかゝる地方問題に限らず日支兩國のために同慶にたえず候新嘉坡、彼南等にて特に感じ候は馬來人印度人等の体格の堂々面構引縮り慄慄なる事にてよく之れ教へなば洋人の羈絆を脱する事決して難からざるべしと深く思ひ申候。之を教ふるもの果して誰ぞや之を救ふの日果して何時ぞや。明朝は古倫母へ上陸仕り釋迦如來生誕の地と云はるる佛牙寺(コロソボより七五哩往復八時間)に詣で亡き父母や兄の冥福を祈らばと存居り候。發航以來茲に四千哩海上無事平穩名にし負ふべ

ガル灣口のムンスーンもなんの障なく頗る元氣にて希望に満てる航海をつづけ居り候へば乍憚御放念被下度候。留守中は何かにつけ一方ならぬ御高配に預ることとて謹んで御禮申上候。 敬具

六月六日夜
ベンカル灣口鹿島丸カビンにて
古谷榮藏

針塚校長宛

千曲會日誌

- 六月十日 會員名簿調製上に關し蠶蠶科事務室へ各主任者參集研究打合せを開催せり。
- 六月十三日 新潟縣五泉町の大火に類焼せし丸山武夫氏(蠶五)より挨拶狀寄せらる。
- 故澤田英三郎氏遺族へ金二十二圓五十二錢故松浦清氏遺族へ金二十二圓有志より送られし弔慰金を贈呈せり。
- 六月十五日 群馬縣前橋地方一帯に亘り大暴風雨襲來の趣に付兩氏千曲會長へ見舞券會員の安否を照會せり。
- 六月二十日 故小澤勇氏遺族より弔慰金に對する挨拶狀寄せらる。
- 六月二十一日 神戸生絲検査所在勤の渡邊隆平氏(絲九回)逝去の旨兵庫支會長より通知あり即日遺族に對し弔慰狀發送せり。
- 六月二十四日 故松浦清氏遺族より弔慰金に對する挨拶狀寄せらる。
- 六月二十九日 故澤田英三郎氏遺族より弔慰金に對する挨拶狀寄せらる。
- 七月一日 兩氏千曲會長より先般の大雷雨に會員一同無事にして又被害もなかりし旨回答ありたり。
- 七月五日 故渡邊隆平氏の葬儀執行せらるゝを以て弔電を發せり。

終身會費納入者氏名

第九條第二項に依る終身會費納入者は既報の如くであるが其の後に於ける納入者は次の如くである。

- 竹内五之助 田浦 準
田中福雄 高木 三治
森 干城 岸 勝彌
堀江 尙 牧野金次郎
田附卯一郎 飯島正胤
戸田勝一 塩見喜六
刈田恭一

昭和八年年度千曲會通常會費納入者氏名

昭和八年七月五日迄に受入れた會費納入者氏名は次の如くであります。それ以後に受入れの分は追つて報告申し上げます。數多い事ですから中には間違が無いと限りません。若し誤がありましたらば御申越下さい。左記には第三回までの卒業生の分は載つて居りません。これも改めて報告申し上げます。○印は金五圓(通常會費及び蠶絲學雜誌代)納入のもの×印は金四圓(通常會費のみ)納入のものであります。

- 蠶四回
○市村 幹司 ○二宮 九三二
○吉野 健吉 ○中根 信一
○中尾 小太郎 ○岡部 康之
○小林 啓介 ○五島 眞喜太
○神原 鶴次郎 ○木脇 實熊
○皆川 二郎 ○高橋 義三郎
○塩見 豊一 ○山口 博輔
蠶五回
○片岡 清治郎 ○田附 由治郎
○田村 三郎 ○長瀬 深見
○中島 靜太郎 ○栗原 章

- 後藤 宰一 ○荒牧 伊勢美
○式田 定千代 ○日比野 一夫
○關田 九平 ○廣井 嗣俊一
○弓田 弘
蠶六回
○橋本 廣 ○萩原 孫三
○太田 慎一郎 ○糟谷 道三樓
○野本 治兵衛 ○藤井 周藏
○古東 幹太 ○小山 二郎
○齋藤 菊雄 ○櫻井 吉利
○佐瀬 直一 ○大井 俊三
○猪坂 直一 ○大井 學
蠶七回
○橋本 武光 ○鍵谷 傳
○土岡 修二郎 ○上林 多兵衛
○小野 昌二 ○福富 繁
○久保田 昌人 ○齋藤 隆
○天野 武良 ○齋藤 隆
○岸田 繁雄 ○味知 廉三
○本谷 良雄 ○森本 爲之助
蠶八回
○岩瀬 義夫 ○細川 茂司
○根岸 丑之輔 ○桑田 庄七
○永田 平 ○齋藤 鳳一
○小島 杉門 ○齋藤 鳳一
○石原 石司 ○勸使川原 保
○小林 繁
蠶九回
○原田 種龜 ○原 清志
○越智 岩平 ○荻野 上風
○門平 潤一郎 ○勝又 藤夫
○金崎 眞英 ○柏倉 豊吉
○山口 富五郎 ○大高 雄三
○小松 茂久 ○安島 義久
○佐藤 愛之 ○佐藤 彰二
○佐藤 重太郎 ○四方 定雄
○清水 清 ○鈴木 貞治
蠶十回
○菅野 三郎 ○米田 俊雄
○竹村 中和 ○山本 三六郎
○古川 俊之 ○深谷 正一
○母袋 良平 ○宇田 虎一郎
○小 中 潔
蠶十一回
○池田 正五郎 ○猪瀬 親二
○富田 治衛 ○奥野 憲三
○中島 茂 ○水城 孝男

- 清水 術敏 ○増田 孝
○佐藤 義助
蠶十二回
○大谷内 三衛 ○谷川 海藏
○山口 定次郎 ○安川 正生
○丸山 十吉 ○北島 兵衛
○宮下 京三 ○中山 吉二
○井上 兵一郎 ○中山 吉二
蠶十三回
○今村 良郷 ○沼田 周造
○吉田 隆雄 ○武本 治也
○内田 訓之亮 ○野口 活也
○野澤 司馬彦 ○山岸 繁治
○寺島 雅彦 ○宮川 繁治
○宮城 博 ○宮澤 泰市
○三輪 貞徳 ○鈴木 精喜
○大熊 市治郎 ○加々井 道喜
○金子 幸一 ○齋藤 孝道
蠶十四回
○林 和夫 ○竹内 孝三
○竹内 惠吾 ○古越 光潔
○宮澤 貞亮 ○榑村 忠義
○宮崎 英夫 ○大越 信
○鈴木 忠次
蠶十五回
○池田 善三 ○西本 朝平
○片山 次夫 ○山本 誠
○山本 友之丞 ○小林 貫一
○小林 重男 ○兒玉 信尊
○新井 宇之輔 ○櫻井 弘吉
○宮本 豊彦 ○平野 秀男
○森戸 孝 ○仲島 幸藏
○降旗 孝 ○宮崎 秋雄
蠶十六回
○井澤 喜三 ○富 秀雄
○岡崎 勘助 ○大澤 寶市
○竹内 備佐雄 ○桑原與四右衛門
○内苑 敏吉 ○松本 一二
○熊谷 恒次 ○藤旗 和人
○深谷 朋二 ○木内 茂雄
○向坂 朋二 ○池田 篤治
○宮本 清松 ○池田 篤治
蠶十七回
○出穂 稔 ○橋本 重光
○濱原 淳一 ○西澤 正文
○金澤 勇 ○田口 亮平

- 瀧口 昇 ○中澤 利三郎
○北原 喜昌 ○宮崎 俊雄
○關 辰雄 ○小林 辰夫
蠶十八回
○一之瀬 貞嗣 ○細川 俊雄
○千村 敏三 ○尾崎 利雄
○若林 爲夫 ○高瀬 毅一
○竹内 直人 ○山本 賢市
○上杉 慶次郎 ○古川 正信
○山本 卯一 ○坂口 眞吉
○藤井 四郎 ○永井 眞吉
○百瀬 哲一 ○栗原 保定
○淺川 武男
蠶十九回
○宮澤 卿 ○戸部 正久
○千吉 良幸 ○梶野 陸
○岡本 正男 ○塚田 勝男
○春日 卓郎 ○塚田 勝男
○香掛 久雄 ○赤羽 是壽
○勸使河原藤之助 ○枇杷木 瀧雄
○宮城 薫
蠶二十回
○福地 進 ○赤池 勝男
○小林 修 ○杉浦 卓二
○清藤 三郎 ○駒井 慶治
○山崎 勝巳 ○中島 眞
○遠山 正人 ○吉田 恒夫
○宮入 保 ○吉田 太郎
○都築 清治 ○寺島 一萬太郎
○町田 史郎
○市川 信一
蠶二十一回
○伊藤 勢龜 ○橋本 景吉
○小坂田 亮 ○吉澤 武夫
○都筑 賢吉 ○久保田 一徳
○松尾 順策 ○父母 仙藏
○小山 久一 ○宮田 清義
○森山 二郎 ○鈴木 孫市
○鈴木 鐵次郎 ○須田 國之助
蠶二十二回
○石坂 虎治郎 ○伊藤 清
○井上一郎 ○藤井 侃
○梅澤 庫太郎 ○坂口 良吉
○手塚 芳太郎 ○友重 誠三
○宮入 誠一 ○味澤 泰造
○船越 重勝
蠶二十三回
○市川 清男 ○原 英三
○大久保 秀次郎 ○岡村 源一
○吉田 榮治 ○長池 遊龜
○山口 貞周 ○的場 小六
○手塚 雄一 ○佐藤 種雄
○唐木田 藤五郎

- 池田 忠次郎 ○石塚 浪之助
○西山 陳治 ○渡邊 耳
○河井 正 ○高橋 安雄
○梅澤 高治郎 ○甲田 勝衛
○甲本 正道 ○三浦 重雄
○栗原 保定
蠶二十四回
○飯島 輝雄 ○西 孝重
○本間 久 ○富田 庄三郎
○大根田 丑一郎 ○大野 久藏
○奥村 好一 ○佐藤 喜代三
○鈴木 教吾 ○小笠原 喜代三
○尾澤 義朗 ○黒田 誠一郎
○小宮山 太助
蠶二十五回
○堀忠太郎 ○大谷 勇
○土屋 茂一郎 ○村山 普
○黒岩 覺 ○湯澤 重敬
○南澤 清 ○島倉 督造
蠶二十六回
○石濱 正巳 ○川船 卓爾
○浦生 勇一 ○塚田 卯平太
○恒川 芳保 ○倉橋 琢而
○山岸 實雄 ○前田 益藏
○小山 俊吾 ○小山 雅夫
○新庄 哲二郎 ○小山田 道男
○若林 新一郎
蠶二十七回
○石井 謙三 ○林 十郎
○山本 奈良三郎 ○牧野 弘
○小山 清 ○塩田 健介
(以下次號)

編輯室より
例により千曲會々員名簿(七月一日現在)を千曲時報七月號の附録として千曲時報と一緒に發送する豫定でありました。が都合で一ヶ月遅らせ八月號の附録として發行する事に致しました。本年の暑きは文字通り殺人的です、益々御自愛御健闘の程を祈ります。